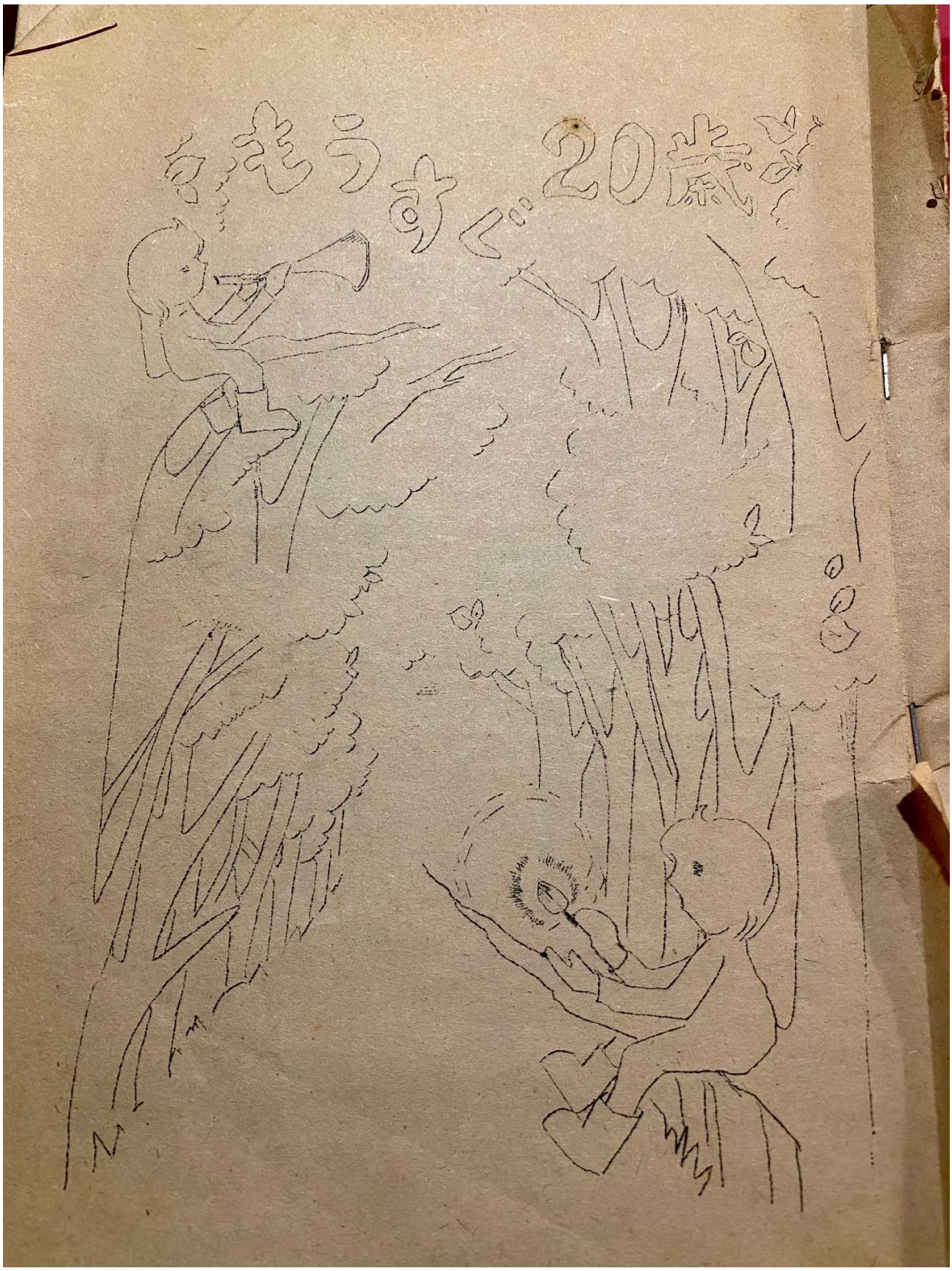
さようなら20歳

続蟻ときりぎりす

薗部英夫

留学から帰ったばかりの若いきりぎりすは夏草の生茂った武蔵野の草原を北を目指して歩いていた。日頃の音楽仲間の若いコオロギやスズムシなどが声をかけても一向に気づかないらしくて、急いで北を目指している。北にはあの蟻達の住むうすよごれた町があった。しかしなぜ彼は歩いているのだろう。彼は居ても立ってもいられなかったのである。あの蟻ときりぎりすの事件で見殺にされ、あへない最期をとげたきりぎりすは、彼の兄であったからであった。玄術家として最高の名誉を得、また彼にとってはよき虫生においての目標であった兄がよりによって、あのうすぎたない、およそ低俗な連中のなかで無残な死に方をしたと聞かされて、彼の若い血はいきりたった。そして彼はもうきりぎりす達の住む草原の町を飛び出して北を目指して歩いているのであった。夏の太陽はギラギラと照りかがやいている。

米　米

一方あのきりぎりすの事件以来、初老の蟻はそれを見殺にしたということで、アパートや仕事場の虫達から

「災難でしたねえ」

「お気の毒さまです。」

などと声をかけられはしたが、その言葉の奥にひそむ、自分に対する非難をひしひしと感じて、彼は他人に対する不信感や、警戒心を深めていった。

「自分は悪い事はしていない、あの時あの状態であのきりぎりすに餌を与えていたらいったい自分は、そして自分の家族はどうなっていたろう。家族四人が細々と暮らせる餌を、自分と

自分の細君は、夏の間必死で稼いだのである。それを普だんは芸術家だと言って遊んでばかりいたきりぎりすに、どうして餌をわけてやる必要があったのだろうか、いやそれよりもどうしてそんな余裕が自分達にあったろうか。あの時あっするよりしかたなかった。」

もう忘れよう。彼はそう努めた。

時はすべての事をボカしてくれるとのであろうか。世間の彼に対する感情もだいぶうすれて、彼もやっとともとの生活を取りもどしかけていた。ある日曜日であった。あの若いきりぎりすが彼の家にやって来たのは。

やがて若いきりぎりすはあの蟻の住むアパートを見つけ出した。彼等きりぎりすにとっては、蟻達の住む人間の家のあたりの土地は、けがれた土地であった。それ故に彼は蟻たちのアパートにやって来るのはこれが始めてであった。

「ごめんください。」

若いきりぎりすはあの蟻の家の玄関を同じようなアパートの中からみつけだした。

「はーいッ。」

奥から、あの蟻の細君が洗たくでもしていたのであろう、うす汚れた手ぬぐいで手をふきながらこちらへやって来る足音がだんだん近ずいて来た。

「どなたですか あなたは。」

彼女は若いきりぎりすが、いったい何のためにここにやって来たのか、のみこんだらしく、大声でさけんだ。

「帰って。おねがい、帰ってちょうだい。」

「いや ぼくは帰りません。御主人をお呼びください。」

「おねがいですから、私達の幸福をこわさないで下さい。」

「僕は帰りません。御主人を……。」

そう最後まで言い終らないうちに、あの蟻が現われた。若いきりぎりすの想像していたふてぶてしいはずの体格の蟻とは違って、彼はどこにでもいる極平凡な初老の蟻であった。

「お通ししなさい。」

彼は細君にそうポツリとそう言った。

米　　米

ひと目ですべての家の中がながめられる、そんなふさなうす汚れた家であった。若いきりぎりすは口火を切った。

「あなた方が、あのきりぎりすを直接殺したわけではなく、そして自然界の法にも違法していないことは無論承知です。僕が今日話をするのは何故兄があなた方の所へやってきたのかということです。あのきりぎりすは僕の兄でした。そしてその兄は僕にとって大先輩であり、生きる上での目標でした。またこまっている時にはたよりになるし、時にはきびしく、時にはやさしく、そしてこと音楽に関しては、おそろしいばかりの熱意が見られました。兄の生きる目的は音楽であり、生きているあかしが音楽です。そんな兄でしたから経済面においてはだいぶ義姉に苦労をかけたようです。僕は時にはそんな兄に反発を感じて義姉にそれを話したことがあります。でも義姉は兄さんから音楽をうばってしまったら、兄さんでなくなってしまうし、そうなってしまったら私も生きるかいをなくしてしまうでしょうと僕にいいました。僕にはその時にはよくわかりませんでしたが、今になってみるとわかる気がするのです。でも日ごとのむりがたたったのでしょうか、その義姉はある秋の深まった日、おびただしい喀血をしたそうです。僕はその頃、兄と義姉とのすすめで留学の地にいたのです。それ以来義姉の病状は悪化しました。それからです兄が音楽をすてたのは、兄のすべてであった音楽を

です。兄の生活は変わりました。しかしこれといって手に職のない兄にとっては秋の終りに働き口があるはずがありません。兄は日ごと仕事をさがして歩きました。でも義姉さんの病気はもう最期に来ていたのでした。だから兄はやむにやまれず……。」

ここで若いきりぎりすは言葉をつまらせた。

「やむにやまれず……あなたがた蟻達のところへ……あなた方のところへ、あの長い道のりを何とたべずに必死の思いでやって来たのです……。」

蟻とその細君はうつむいたままであった。

「それをあなた方は、自分のまいた種だとあざ笑った。夏の間、働いてなかった当然のむくいだといって兄を思い弄した。どうしてあの時あなた方の独断でそれを天罰だと決めつけてしまったのか。あなた方に法的な罰はないでしょう。しかしあなた方の心の罰は永遠に消えはしないでしょう。」

「奥様はどうなされましたか。」

細君が涙ながらにたずねた。

「兄の死んだ晩なくなったそうです。」

若いきりぎりすは言葉がとぎれかかった。蟻の細君と主人は静かに泣いた。

＊　＊

若いきりぎりすは去っていった。そしてまた蟻とその細君と二人の子供達の生活が始まった。時は流れた。若いきりぎりすは兄がそうしたようにやはり音楽に生きることを求めた。しかしそれは、あくまでも彼の築こうとする彼独自の道であった。そんな生活の中で彼はふと思いにふけった時、まざまざとうかんで来るのはあの蟻の所へ行った時の記憶である。そのたびに彼は多少心のいたみをおぼえるのだった。あまりにあの時は一方的すぎた。彼等には彼等なりの言い分があったはずだ。それも聞かずに……

いったい自分が蟻達にあの話をして何んになったというのか、あの時あの細君のうったえた

「帰って下さい。私達の幸福をこわさないでください。」

の言葉が時がたつにつれて彼の心を重くしていった。

一方蟻の家では、あの蟻の身体が原因不明の病気でむしばまれていた。人間界に同居する蟻達の宿命なのかもしれないが、公害はやはりおそってきていた。その状態の中で順応できる奴は生き残るし、彼のように順応能力の弱い者達は死をよぎなくされた。そして働くことのできなくなった蟻の運命は知れたものである。なみなみならぬ、いっさいすべての圧力が彼の細君にかかっていた。

「もし万一の事があったら。」

彼女の頭は混乱した。しかし食うために今を働かなければならなかった。そして死はあまりにもあっけなくやってくる。彼女は一昼夜泣いた。

＊　＊

夏の終りは知らぬまにやってくる。秋の虫達にとって最高で最期の時がやってくるのだった。

若いきりぎりすは、来る日も来る日も音楽に情熱をかたむけた。そんなある日、彼はあの蟻の細君が自分に面会に来ていることをつげられた。一瞬悪い胸さわぎがおそった。何かあったのではないか、おそるおそる彼女のいる場所へ歩いていった。

彼女は夕日に背を向けて立っていた。側には二人の子供達がよりそっていた。しずみかけている夕日が彼女達を照らし、こちらから見ると彼女達はまるで燃えているようだった。夕暮れ時の風はもうはだざむかった。

「おひさしぶりです。」

彼は彼女へこう言った。
「あっ、あっ、どうもこれは、おしさしぶりでございます。」
ふいをつかれて彼女はおどろいたらしかった。若いきりぎりすはホットした。彼女の顔は輝いていたからだ。
「先日主人はなくなりました。」
彼女はいとあっけなく言った。
「え!! なんですって。」
「……………」
「え!! どうして……どうしてまた。」
ふいうちだった。あまりに……。彼のこころは動転していた。しかしこれからずっと自分におそらく何かわからない罰の意識がついて回ることを直感した。長い本当に長い時間がすぎた。
「私達はこれから旅へ出ます。また私達自身の新しい生活を作り上げていかなければなりませんので。お兄さま御夫婦には気の毒なことをしたと思っております。またすまないことと思っております。でもやっとひとつのくぎりが私にはついたと思います。自分本位の勝手な考えでしょうけど、これから私は夫の分まで働き、子供達をそだてて行くつもりです。それは義務というよりは私の生きる目的です。貴方のお兄さまも、生きることをみつけた方でしょう。私も生きようとしています。ですからきっと……でもむしのいい話しですね。」
若いきりぎりすは言葉がつまった。いったいこれから生きてゆこうとする彼女に対して何がいえるだろうか。
「きっときっと兄さんも許してくれますとも。ですからガンバッて下さい。」
若いきりぎりすは彼女の手をにぎりしめた。彼の目はくしゃくしゃだった。そして彼女の決して若くはない、身体しかし

そこにはあの男にも美しい、あの女の姿が
あった。
それから、これは夫のあなたへのお願
です。」
そう言って彼女は手紙をわたすと、
「さぁ私達はこれで、もう二度と会うこと
はありませんが、お元気で」
彼女のふみだす足は力強かった。そしてそれ
をさえぎる者も力強く見えた。

＊　＊

若いきりぎりす殿

長い間、御無沙汰いたしております。初め
て貴方にお目にかかってから、いつか必ずと
思っておりましたが生来の筆不精のため、つ
のまにかこんな時期にまでのびてしまいまし
た。
人間の公害は私にとっては、命とりのものでし
た。残念ながら私はもう長くはないでしょう。
日に日に体は弱ってゆくばかりです。

貴方にとって私の手紙は弁解のように
思われるかもしれません。しかしけして
そうではないのです。神にちかっても、
私のありのままのものなのです。
貴方の兄さんの事件は私にとっては、
たしかに迷惑なものでした。あの時点に
おいては私も必死でしたし、とても他人
を助ける余裕はありませんでした。で
すからあの時、私のとった態度はあれさ
りとてなかったと思います。お互いの「不
幸」だったのです。そうです「不幸」でし
た。しかし「不幸」とはいえ、私は結果と
してあの方々を殺してしまったのです。
その後、たしかに貴方の言うような、法
的な罰ではない、心の罰が私にのしかか
って来ました。あの日からというもの毎
晩のように眠れない日々が続きました。
妻とて同じ状態でしたでしょう。もう
このことはわすれようとしまし
た。時にはいっそ死んでしまおうかと思

ったこともあります。でも私にはとてもできないことでした。妻がいます、三人の子供がいます。私の命は今や私だけのものの命ではないのです。いっそ死ねたらどんなに楽だったでしょう、自殺できる人たちはある意味では幸いだと思います。しかし私にはそれはできないことなのです。

そして時が過ぎました。時はたしかにある程度までの過去を不カしてくれるものです。私達の心もある程度のおちつきをとりもどしたのでした。

その頃です。あなたがずうずうしくもひかるまでしょんぼりとそして私達のところへやって来たのは……

貴方は真実を追求するくせにしかし貴方が来てくれて本当によかった。すべての事がズバ納得できました。もしあのまま事情も知らずにいたら、おそらく私には何んだかわからない、対機物におそれいだく日々が永遠に続いていたことでしょう。

[illegible]

えないのですが……

だから私は生きようと思いました。自分の罪のためにも。しかし、このとおり私は中途でおれてしまったのです。そしてとうとう殺されに来を待つばかりの身です。一方では生きているわずらわしさや自分の罪から解放されたい気持から、以外に死に直面しておちついている自分があります。

若い頃自分の死について考えた時はもっとあせるだろうと思っていました。しかし以外におちついている自分、いったい何が変わったのでしょうかね。しかし一方では当分妻と子供のため、それに四割のために生きたいと思います。でもあれ達は自分の道を見つけて生きてゆくでしょう。できあがれば、あれ達の生きていく姿を見守ってやってください。　ではさようなら。

若いきりぎりすは秋を流れ冬になると外へ出た、秋の夜空には星がこぼれるば

分りだった。この宇宙は永遠に続く。しかしその中で生あるものの生きる道とは……いったいなんなのか。わずかばかりのとまり木である生の中で、いかに自分の生きる道をさがしてゆけばいいのか。彼には音楽があった。でももっと別のところに自分の生きる道はあるのではないのだろうかと思った。しかし生きなきゃダメだと思った。愛するものがあるかぎり、そのために生きようと思った。

武蔵野には、もう秋がやって来ていた。もうすぐ、この葉は落ちはじめ冬がやって来るだろう。しかしそんな中で若いきりぎりすは生きようと思った。

あとがき

第一回文集の「天と地と人間と」で主人公を殺してしまったことを、僕は近頃後悔するようになっていた。やはりあの主人公はどんなにみじめであっても、生にしがみつけばよべきではなかったかと。人は愛あるかぎりほきねばならないと思う。

そしてこの「続・蟻ときりぎりす」はイソップ物語の続きとして物語が進んでゆく。会話文がぎごちなく文章が時々おかしくなるのは、日本の国語教育のもたらした弊害である。

それはともかくとして僕が表わしたかったのは「罪の意識」と「家族」との問題であった。家族の中の経済的な柱である初老の蟻と家族からは離れた存在にある若いきりぎりす、そして母であることと人間であることを共に生きようとする蟻の細君、不幸にして死んでしまう父蟻、しかしその愛は永遠である。

そして、これから子供と共に生きようとする母蟻には女の強さがあると思う。人はだれしもが多かれ少なかれ、なんらかの「罪の意識」をもって生活している。そしてその生活の中で悩み苦しみなが

らきてゆく。生きてゆくことはある意味では苦痛かもしれない。しかし、生きる中には「愛」がある。永遠の「愛」がある。僕は「いやな」人間だけど、いや「いやな人間」だからこそ、「愛」を築いていかなくてはと思う。しかし毎朝の満員電車の中ではとても「愛」はねエ……やはり「愛」を築くためにはある程度の基盤は必要だと思う。二十歳を目の前にして思うこととはこんなことである。

一九七五年十月。